



- 挨拶 ～これからの試験研究に思う～
- 知識の泉(森の話/木の話)
- 究める／広める／育てる(業務最前線)
- 自然彩々(センターの四季/生き物たち紹介)
- 楽／学広場(イベント・研修会)



これからの試験研究に思う

林業技術総合センター所長 永田 一郎

間もなく、あの東日本大震災から3年になろうとしています。この間、国の内外から温かいご支援を受け、県内各地で震災がれきの処分完了など復旧作業が進みました。

そして今年から宮城県震災復興計画第2期の4年間の「再生期」に入ります。全国の復興モデルになるような「創造的復興」への道を、午年ですので、駿馬の如く勢いよく駆け上がり、本県の復興が更に進展するよう当センターとしても、引き続き森林・林業・木材産業に関わる実用的な試験研究と技術開発を行い、その成果の普及により、地域林業の振興と震災からの復興を支えて参ります。

さて、正月伝統行事の仙台初売りが盛況であったように、今年4月に迫る消費税増税もあり、自動車や家電などの購入意欲が高まってきているように感じますし、住宅着工、公共投資、民間建設も増えています。素人目にもアベノミクスの効果は、景気回復への道を進んでいるように感じられます。木材産業界でも、合板、建材、木質バイオマス資源等としての原木需要の増加に現れてきています。

一方で、日本は国土の7割を森林が占める世界トップクラスの森林資源を有する国ながら、木材自給率は残念なことに3割に止まって、山村は高齢化と過疎化の課題を抱えています。このような状況を克服するため国では、昨年12月に、農業・農山村全体の所得を今後10年間で倍増させることを目指した「農林水産業・地域の活力創造プラン」を策定しています。

その中で、山村地域の活性化には、豊かな資源を活用した林業の産業としての復活が欠かせないとして、CLT(直交集成板)等の新製品・新技術の開発と普及による木材需要の創出、施業の集約化や地域実情に応じた路網整備と高性能林業機械の導入等による国産材の安定供給体制の構築、鳥獣被害対策の強化等による適切な森林の整備・保全等を通じた森林の多面的機能の維持・向上を図ること等で、「林業の成長産業化」を実現させるべく国産材供給の増加量と間伐等面積に目標値を示しています。

この「林業の成長産業化」という言葉には、地球環境や山村の多面的機能の維持・向上に、地域産業(林業)の役割が大きいことと、豊かで健全な地域資源(森林)が必要であることが、国民に広く理解されてきている背景を感じます。

このような今こそ、これからの本県の試験研究においては、震災復興にかかわる緊急の取組に加え、これまで蓄積された試験研究成果を活用し、国の施策の展開方向を視野に入れ、新たな木質資材の物理的性能試験、低コストな造林保育技術の開発、路網と合わせた施業の集約化手法の研究、更にはこれらを担う人材の育成など、どのような山村地域社会づくりを目指すのか、どのように質的・量的に森林資源の豊かさを維持していくのかなど、長期的視点を持って宮城の地域づくりと連携し、林業(地域産業)の活性化に積極的にかかわる試験研究機関として、林業技術総合センターの機能を十分に発揮できるよう計画的な施設整備や研究林の再整備なども進めながら、職員一丸となって取り組んでいく必要がありますので、引き続き皆様のなご一層の御指導、御協力をお願いします。



知識の泉(森の話/木の話)

森林や木材に関するとおきの知識をわかりやすくご紹介します。

◎ 木材の受託試験を行っています

当センターでは、木材業務のほかに民間事業者の製品開発等を支援するため、木材の強度試験や材質試験を実施しています。試験は、JIS や JAS 規格などで規定されている方法に準じて行います。

震災後は、復興合板の曲げ試験や LVL (単板積層材) の強度試験を行い、被災企業を支援しました。最近では、乾燥材の普及に伴って、試験材の含水率 (全乾法による) 測定の依頼も増えてきています。

その他、震災で被害を受けた旧有備館の復旧工事に使用される予定の部材の曲げ試験を行ったほか、今後は、新製品開発に向けた集成材の実大曲げ試験を予定しています。

なお、当センターは、検査、性能評価を行う機関ではありませんが、依頼いただいた試験が終了した後に試験成績書を発行します。

また、試験の項目や経費等の詳細については、当センターのホームページをご覧ください。



中央集中荷重による実大曲げ試験



部分横圧縮 (めり込み) 強度試験

【地域支援部 皆川 豊】



究める/広める/育てる

センター業務の柱である試験研究や普及指導、人材育成 (研修) 業務の最前線をご紹介します。

◎ マツノザイセンチュウ抵抗性実生家系の評価と品種開発

○ 研究の背景・ねらい

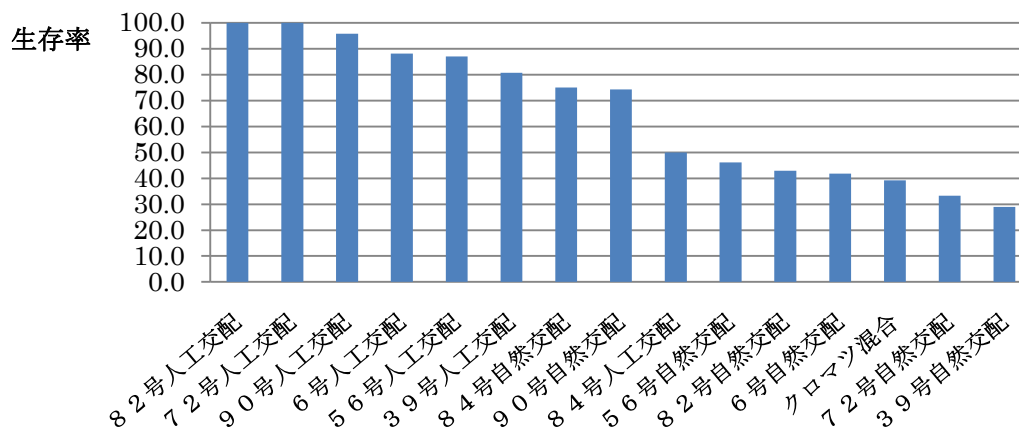
宮城県には、特別名勝松島における風致林や沿岸部における海岸防災林をはじめ、県民生活に密着したマツ林が多く存在していますが、マツ材線虫病の広がりにより、公益的機能の低下や景観の維持に支障をきたしています。

このことから、松くい虫被害跡地の復旧及びマツ材線虫病に強いマツ林の造成に必要なマツノザイセンチュウ抵抗性クロマツ苗木の早期供給開始が望まれていました。また、マツノザイセンチュウ抵抗性品種にも抵抗性に差が存在するため、抵抗性の効果発現の確実性から、実生後代の抵抗性を評価し、抵抗性の高い家系の種子を中心に供給することが求められています。

○ 成果

宮城県選抜抵抗性クロマツ品種7家系については、クローン間の採種量に大きな差異があり、試験に使用する十分な苗木数を確保できなかったため、同一本数での試験とはなっていませんでしたが、マツノザイセンチュウ抵抗性については、家系により抵抗性の差に一定の傾向が見られ、人工交配 (写真1) によって得られた実生苗に比較し、自然交配による実生苗に対する接種試験後の生存率は低い傾向が見られました (表1)。

表1 平成23年度接種試験結果



この原因としては、当抵抗性クロマツ採種園がまだ若齢で、園内花粉量が十分ではなく、園外花粉の影響を大きく受けた種子からの実生苗が多かったものと考えられます。

抵抗性品種の開発は、これまでの7品種家系に加えて、激害地から選抜したマツノザイセンチュウ抵抗性候補木について、マツノザイセンチュウを人工的に接種する一次検定試験を実施し、より多くの抵抗性品種の開発を進めています。

抵抗性実生家系の評価や抵抗性品種の開発に用いたマツノザイセンチュウ接種技術は、苗木生産者が確実なマツノザイセンチュウ接種済健全苗を生産出荷する際に必要な技術であり、重要なものとなっています。そのため県内の若手苗木生産者に対し、マツノザイセンチュウ接種技術講習会等を開催し、接種技術の指導とマツ枯れメカニズムについての講義を行い、技術と知識の習得を進めています（写真2）。

○ 成果の活用

東日本大震災で壊滅的被害を受けた宮城県の海岸防災林の再生に必要とされるクロマツ苗木は大量であり、必要本数全てをマツノザイセンチュウ接種済健全苗として供給することは困難な状況にあります。このことから、適切な抵抗性実生家系の評価に基づいた抵抗性の高い家系からの種子採取は、マツ材線虫病に強い海岸防災林造成のための苗木生産効率化と省力化に貢献するものと考えています。



写真1 人工交配状況

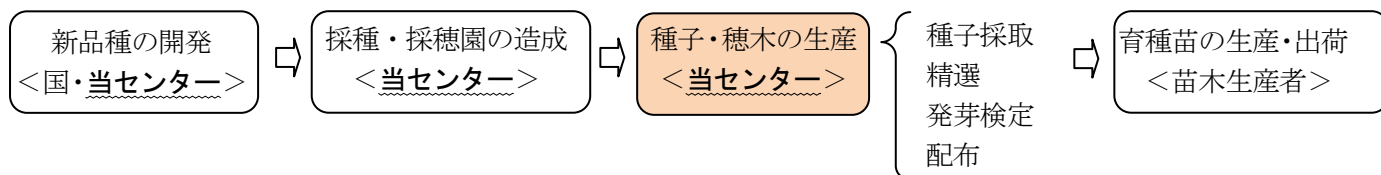


写真2 マツノザイセンチュウ接種状況

【企画管理部 今野 幸則】

◎林業種苗の生産と供給 ～採種作業から発芽検定まで～

タネから苗木を生産するまでには、様々なステップがありますが、そのスタートラインでは林業技術総合センター（以下、「当センター」）における育種研究や種苗生産の技術が生かされています。



さて、メッサ第 29 号では育種研究の概要と、穂木の生産に関する春の作業を中心にご紹介しましたので、今号では、種子の生産と配布に関する秋から冬の作業を中心にご紹介します。

○種子採取のタイミングが重要

街路樹や山の木々が色づく 10 月になると、マツ類やスギ、ヒノキなどの採種園の木々も実りの時期を迎えます。種子を得るためには、まず球果（マツで言うと松ぼっくりのこと）を採取します。球果の間にある種子は球果が開くとこぼれ落ちるので、種子が成熟してかつ球果が開く前のタイミングで採種することが重要となります。マツノザイセンチュウ抵抗性クロマツの場合は、剪定鋏で一つ一つ丁寧に採取します（写真）。当センターでは、ほとんどの樹種が同じ時期に実るので、10 月は収穫で大忙しです。

採取した球果は約 20～22℃に保たれた乾燥室で乾燥させます。すると球果が開き、翼のついた種子が姿を現します。



採種園にて脚立を使って球果を採種 採取直後の抵抗性クロマツの球果 球果が開いてきた様子と種子

平成 25 年度に採取した樹種別の種子数量は下表のとおりです。平成 24 年度は全体的に凶作年でしたが、平成 25 年度はスギ、ヒノキ、アカマツが豊作、精英樹クロマツと抵抗性クロマツは並作でした。

表 1 平成 25 年度採取球果数量と精選種子数量

樹種	生球果数量 (kg)	精選種子数量 (kg)	種子粒数 (粒)
スギ	687.0	60.5	約 2000 万
ヒノキ	319.0	30.0	約 1000 万
アカマツ	142.0	5.0	約 50 万
精英樹クロマツ	103.0	2.1	約 10 万
抵抗性クロマツ	229.3	7.7	約 30 万
計	1,408.3	105.3	—

○種子の精選は風のちからで

適切な時期を選んで採取した種子でも、充実した種子とシイナとよばれる充実していない種子があります。充実していないと発芽が期待できないので、充実した種子を選別する必要があります。選別することを精選といいます。マツ類は翼が大きいので、最初にネット類に入れて手でもみ種子の翼を取り除きます。その後、樹種毎に何度もふるいにかけて、ゴミを取り除きます。充実した種子は重く充実していない種子は軽いので、最後は風選器具（唐箕）を使って、風のちからで精選します。



①ふるいにかけて種子を選別



②唐箕にかけてゴミを取り除く



精選された種子

○精選した種子は、発芽検定で確認してから苗木生産者のもとへ

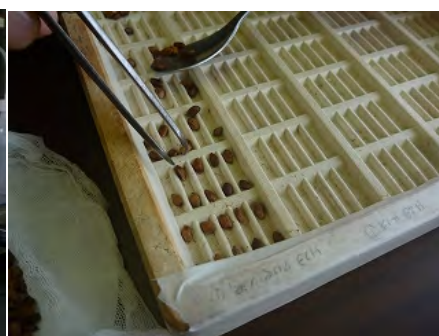
精選した種子を苗木生産者に配布するに当たり、種子の良否を鑑定する必要があることから、発芽率の検定が重要となります。採種年の発芽率についてみると、クロマツは80～90%、スギは30～40%など樹種によって異なります。種子に豊凶があるため、当センターでは3年間種子を保存していますが、保存期間が長いと発芽率が落ちます。また発芽率は、豊作年が高く、凶作年は低い傾向にあります。発芽試験は「国際種子検査規定」に準じて次のような手順で実施します。



①1000粒ずつガーゼに包み流水殺菌



②殺菌剤で消毒

③滅菌済の素焼皿に100粒を並べ
蒸留水を受皿の1/3位に張る④発芽器に入れ、温度を23℃に設定し
樹種毎の発芽締切日まで維持する

⑤発芽状況の確認

発芽締切日※に樹種毎の発芽状況を確認し、得られた発芽率から1㎡当たりの播種床に撒く種子の重量を算定します。

2月には播種量の算定資料とともに、当センターから苗木生産者のもとへ種子を配布します。

3月になり寒さが緩む頃には、各苗木生産者のもとで播種作業が始まります。

※発芽締切日：発芽しうるとみられるものがほぼ出そろう時期を目安として樹種毎に定められた日数のこと。クロマツ、アカマツ、ヒノキ21日、スギ28日。

【企画管理部 河部恭子】

◎木質バイオマスの地域利用に向けて ～ 林地残材を有効利用するために ～

「バイオマス」とは、生物 (bio) の量 (mass) をいいますが、最近では、再生可能な生物由来の資源を指しています。中でも木材由来のものを木質バイオマスと呼んでいます。木質バイオマスは、限りある化石資源に対して持続可能な生物資源となり得ることから、有用な資源として期待されています。

また、バイオマス利用がもたらす環境へのメリットとして、カーボンニュートラルがあります。木材を燃やせば炭素が放出されますが、これは、元々木質バイオマスが光合成によって吸収した炭素です。利用した木材分を造林すれば、炭素が再び吸収され木材に蓄積されることにより、大気中の二酸化炭素濃度は増えません。

○林地残材の利用上の課題

木質バイオマス利用拡大の観点から、林地残材が注目されていますが、現在のところ林地残材は殆ど利用されていません。

その大きな原因のひとつは、建築廃材が産業廃棄物処理の枠組みの中で安価に供給されているのに対し、林地残材は収集等にコストがかかるためです。

県内の木質バイオマスの供給コスト (図1) を見ても切捨間伐材や林地残材の供給コストが際だって高く、運搬距離もコストに大きく影響を及ぼしています。このことから林地残材を如何に低コストでプラントに供給できるかが大きな鍵となっています。

○地域内で森林資源を活用しよう

県内でも木質バイオマスの地域利用が行われていますが、これは地域にある資源を循環利用 (写真1) することで、エネルギーの自給が可能となります。

また、発電等のプラントが地域に立地することになれば、地域林業における木材需要への波及効果が大いに期待できるとともに、運搬距離の短縮は、輸送費の削減から供給コストを大幅に抑えることに繋がります。

このことから、地域循環という視点に立った木質バイオマスの利活用に向けた調査を今後実施することとしています。

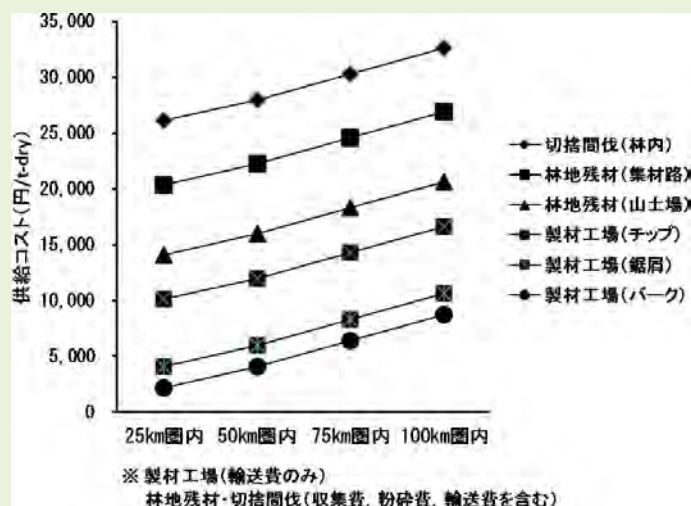


図1 木質バイオマス供給コストの推計 (県平均)



写真1 ペレットに加工される林地残材

【環境資源部 伊藤 俊一】



自然彩々

地域のオアシスでもあるセンターの四季折々の自然や、センター内に生息している野生生物たちをご紹介します。

◎ 冬の花 -ロウバイ-

センター本館の西側の道路を挟み、ロウバイが植えられています。ロウバイはロウバイ科ロウバイ属の落葉低木で2～4mの高さになります。花びらが蜜蝋に似て、花が梅のように枝に直接付いているように見えるためロウバイといい、漢字では蠟梅（蠟梅）と書きます。原産地は中国で、江戸時代の初め朝鮮半島を経て渡来したものとわれ、ナンキンウメ、唐梅とも呼ばれています。日本では観賞用によく植えられています。花が冬に咲くため学名（属名）には、冬（Cheimon）の花（anthus）を意味する Chimonanthus という名が付けられています。

開花時期は1月から3月といわれており、当センターでは気温の高い日が続いた時などは1月に数輪が咲くこともありますが、多くはつぼみのままで、一斉に咲くのは2月下旬から3月上旬頃になってからです。短い花柄のある花は強い香りがあり、直径は2cmほど、下向き或いは横向きに多数つきます（写真1）。花には多数の花被片があり、外側のものは長楕円形で長さは約1.5cmで、やや光沢のある黄色、内側のものはその半分ほどで紫褐色をしています。雄しべは5～6本あり、雌しべは壺形の花床に多数ついています（写真2）。花が終わると花床が大きくなり長さ3cmほどの長卵形の偽果になり、その中にそう果が5～20個入っています（写真3）。

中国では花やつぼみから抽出した蠟梅油や根や茎を薬としているようですが、種子にはアルカロイドであるカリカンチンを含み有毒なので注意を要します。

ロウバイには園芸品種として内部の花被片も黄色いソシンロウバイやマンゲツロウバイ、花の大きいトウロウバイなどがあります。また、近縁種のクロバナロウバイ属のクロバナロウバイは北米が原産地で、初夏の開葉後に赤褐色の大きな花を咲かせます。

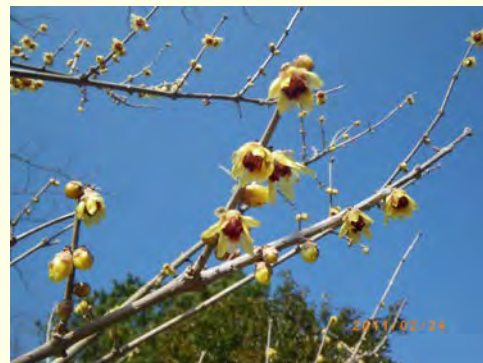


写真1 ロウバイ



写真2 花部（拡大）



写真3 偽果

参考文献

山溪ハンディ図鑑3 樹に咲く花 離弁花①, 山と溪谷社, 2000

【地域支援部 梅田 久男】

◎ 冬の自然の恵み～狩猟と環境保全～

○冬の動物たち

新しい年を迎え、寒い日が続く季節になりました。林業技術総合センターの木々もすっかり葉を落とし、寒々とした雰囲気にも包まれる日もあります。積雪があった時には野生動物の足跡が確認しやすくなります。日頃、野生動物を実際に目にする機会は少なく、最近では自動撮影カメラなどによってその姿を捉えることができるようになってきましたが、足跡やフンなどの生活の痕から生息状況を調べています。積雪は痕跡をわかりやすくしてくれる条件です。

○冬は狩猟のシーズン

それは、野生動物の生息調査だけではなく、狩猟にも当てはまるそうです。宮城県では、基本的に11月15日から2月15日までが狩猟期になっています（種や場所、猟法によって異なります）。狩猟で捕獲された野生鳥獣は、冬の自然の恵みです。上手く処理をすれば臭みではない味のあるワイルドミートを楽しむことができます。冬は落葉し、見通しがよいため猟の安全が確保できると同時に、雪があると狩猟者は狩猟鳥獣の足跡を見つけやすくなります。狩猟鳥獣は雪が少ない場所に集まったり、移動が遅くなったり、食べ物が少なくなるため罠の餌に誘引されやすくなります。あまり積雪が多くなると狩猟を行う労力も多くなりますが、積雪と狩猟とは密接な関係がありそうです。

○ニホンジカ猟と森林環境の保全

近年は、狩猟の社会的役割が重要視されています。趣味として狩猟を行うだけではなく、野生動物の生態をよく知っていることから被害対策の助言をしたり、必要な場合は許可手続きを経て有害鳥獣捕獲を行ったり、個体数が増加しているニホンジカやイノシシを捕獲して数を減らしたり、生息状況調査へ協力したりと様々な役割を担っています。特に、生息密度が高くなると森林に大きな影響を与えるニホンジカを捕獲する狩猟者は、農林業被害の防止だけではなく、地域の森林が持つ機能を維持するための個体数調整に一役買っており、地域の環境を保全しているともいえます。

狩猟者は減少し、高齢化しています。自然と密接な関わりを持ちながら地域の環境保全にも貢献できる狩猟に興味を向けてみませんか？



センター内で撮影されたニホンノウサギ



センター内で撮影されたホンドキツネ



ニホンジカ猟イメージ



ニホンジカ猟収穫個体の解体

【環境資源部 佐々木 智恵】



楽/学広場

センター主催の各種イベントや研修会の開催結果、今後の開催予定などをご紹介します。

◎平成 25 年度「林業教室」を実施しましたー地域林業を牽引し、将来を担う人材を育成しますー

林業後継者や林業に携わる事業者職員等を対象に、森林・林業に関する基礎知識と技術を習得するための「林業教室」を開催しました。本教室は16名が受講し、5月に開講式を行い、2日間の必修講座と7科目の選択講座を10月まで実施しました。

最後の講座では、川上で生産・出荷した木材の加工・流通について、川下側となる石巻市内の製材・プレカット工場などの稼働状況を視察し、そのスケールの大きさと木材資源の安定供給の重要性を学ぶことができました。閉講式で修了証書が授与されると、「林業の基礎・仕組みを楽しく学ぶことができた」と感想が述べられました。林業教室で出会った仲間を大切に、講義で学び、習得した知識・技術をそれぞれの職場で活かし、将来の森林・林業を担う人材となるよう期待しています。

林業教室は、より充実した講座となるよう内容を工夫しながら、今後も継続して開催して参ります。

【研修内容】

必修講座 (2日間)	林業用語、森林の働きと保全、造林保育、宮城の森林・林業、林業経営、特用林産、林業機械、木材流通、ほか
選択講座 (8日間)	森林調査、林業機械操作、間伐実習、造林・森林保護、木材加工・木材利用実習、きのこ等生産技術ⅠⅡ、林業経営



高性能林業機械（フォワーダ）の操作体験



木材強度の異方性を自ら確認します



ハタケシメジの野外栽培実習



閉講式を終えた受講生

◎ 平成 25 年度「里山林の管理基礎講座」を開催しました

里山林は、私たちの身近にあり、昔から多くの恵みを私たちにもたらしてきました。近年、環境保全の重要性が再認識されるとともにライフスタイルの多様化に伴い、森林に対する要求やかかわり方が変化しています。特に身近にある里山林は、自然とふれあうレクリエーションや環境教育、森が人々のところに潤いをもたらす景観的な価値、さらには、野生動物をはじめとする生物多様性を守る空間として、その価値が注目されています。

このため、里山林の特徴、整備の方法や道具の使い方などについて基礎講座を開催し、県民による森づくりの活動を支援する「里山林の管理基礎講座」を4回シリーズで実施しました。

【第1回：10月6日（日）】「里山林管理の意義」をテーマに、講義及び実習を行いました。近隣の良く整備された身近な里山で、森づくりの着眼点や留意点などを観察・学びました。

【第2回：10月19日（土）】「里山林の手入れ」をテーマに、広葉樹の更新方法などの講義を行い、グループごとに広葉樹林の植生調査と森づくりの目標に応じて整理伐などの実習を行いました。

講義や実習を通じて、稚樹の生育には光環境の改善が必要なこと、整備目標に応じて施業が異なることなどが実感できたようです。

【第3回：11月2日（土）】「人工林の森づくり」を主な内容として講義と実習を行いました。間伐の目的や基準とする指標などを学ぶとともに、毎木調査と間伐木の選木実習、手鋸を使った伐採、苗木植栽、竹林観察なども体験しました。

【第4回：11月16日（土）】「道具の使い方とメンテナンス」を主な内容とし、チェーンソーの構造、目立て、玉切り体験のほか、薪割り体験、刈払機の操作体験、真竹を使った「ミニ門松」の製作なども行いました。昼食は薪ストーブを囲み、里山整備の体験談や意見交換を行い、講座終了後には、修了証書が授与されました。

本講座が、より充実した講座となるよう内容を工夫しながら、今後も継続して開催して参ります。



里山林の植生・樹木観察



チェーンソーの取扱い・メンテナンス講座



孟宗竹・真竹を使った「ミニ門松」づくり



薪割体験

【普及指導チーム 森 誠司】

◎ 宮城県トータル・コーディネーターが新たに認定されました

現在、森林・林業の再生や木材産業の振興に向け、高度な知識と技能を有する次世代を担う林業技術者の確保が求められています。このため、当センターでは、効率的な木材生産や森林整備の団地化等をコーディネートし、集約化施業を実践する地域リーダーの育成を行っています。

その一つが、トータル・コーディネーター育成研修であり、平成 25 年度は県内の森林組合や民間事業体の職員 8 名が、7 月 3 日から翌年の 1 月 16 日までの延べ 12 日間にわたり、講義や現地視察、当センターの森林環境や施設を活用した実習や演習などを熱心に受講しました。



森林整備を効率的に進めるために



製材品市場で需要動向を把握



間伐林の実測に汗を流す



図面をにらんで森林作業道を検討

受講者は、それぞれの職場の理解と協力を得て、各自の業務をこなしながら、予定されたカリキュラムを修了したものであり、研修最終日には、全員揃って県からトータル・コーディネーターとしての認定を受けることができました。平成 20 年度からスタートし、第 3 期目を迎えたトータル・コーディネーター育成研修は、今回の認定者を含めて 50 名になります。各地域において様々な立場で活動されており、新たに加わった 8 名の方々も、地域を支える林業技術者として活躍することを期待しています。



認定証の授与



認定者(後列)

【普及指導チーム 皆川 隆一】

◎ 多くの視察者が訪れています

今年度も林業技術総合センターには、県内はもちろん、東北・関東の各県等からも計約 200 名に及ぶ、多くの視察者が訪れました。昨年に引き続き震災による被害を受けた地域からの視察も多く、復興状況や被害対策について関心が高いようです。

視察見学では当センターの概要、震災後の県内林業の状況についてや、最新の研究内容、研究を支える施設の紹介も行っています。限られた時間内で広い構内の全てはお見せできませんが、少花粉スギの挿し穂が挿しつけられたミストハウスや苗畑、多種の試験機がある木材実験棟、きのこ栽培実験棟など、林業関係者でもなかなか目にする事のない施設を、研究内容と併せてご紹介しています。

視察見学は、センターの研究や取組み内容について、県外の方々も含め広く知っていただく良い機会となっております。ご希望の際は、以下の連絡先までご連絡下さい。また、下記ホームページにも詳細を掲載しておりますので、併せてご覧ください。

◎ 連絡先

宮城県林業技術総合センター企画管理部

電話：022-345-2816（代表） FAX：022-345-5377

Mail：stsc-p@pref.miyagi.jp

◎ 視察見学可能日時

月曜日から金曜日 午前 10 時から 11 時 30 分まで、午後 2 時から 4 時まで

◎ 林業技術総合センターHP（視察見学の案内）

※年末年始の休日、祝祭日、行事開催日を除く。

<http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/stsc/sisatukengaku.html>



ミストハウスの紹介



きのこ実験棟内



研究成果の紹介



木材実験棟内試験機

◎ 平成 25 年度林業技術総合センター成果発表会を開催しました

12月8日(水)に、大衡村の平林会館にて、平成25年度林業技術総合センター成果発表会を開催しました。当日は県内の林業関係者等約100名の参加者の下、普及活動成果7題、試験研究成果2題が発表されました。

普及活動成果部門では、森林・林業の専門知識を持ち、県内7地方振興事務所に配属されている林業普及指導員が、各地域の実情を踏まえ日々取り組んだ活動の成果を発表し、下記の3題が優秀な発表として表彰されました。

最優秀賞：「登米地域材で復興住宅を

～登米市木造災害公営住宅建設推進協議会への支援～

(東部地方振興事務所登米地域事務所 技術主査 菅原伸)

優秀賞：「大崎地域における林産物出荷制限解除に向けた取組

～特に原木しいたけ露地栽培の生産再開に向けて～

(北部地方振興事務所 技術次長 相澤孝夫)

「木質バイオマス発電事業に向けた林地残材の確保について」

(気仙沼地方振興事務所 技術次長 村上泰介)

試験研究成果部門からは、被災した海岸林の再生に向けた「マツノサイセンチュウ抵抗性クロマツ種苗の早期大量増殖に向けた取組み」と、全国的に農林業・森林生態系への被害が拡大しているシカ害について、「宮城県におけるニホンジカの生息状況と必要な対策」の研究成果を発表しました。また、当日会場内に展示した当センターの研究成果や刊行物等もご好評頂き、来場した多くの皆様に普及活動・試験研究の成果をお知らせすることが出来ました。



発表の様子



優秀発表の表彰

◎ 林業技術総合センター機関評価が行われました

当センターが実施する試験研究課題については、実施の前後に外部評価委員の評価を受けながら行っていますが、そのほか概ね3年毎に、センターの運営全般についての評価(機関評価)を受けることとなっています。今年度はその実施年度となり、9月6日(金)に、平成25年度林業技術総合センター機関評価が行われました。

評価会議における審議の結果、委員4名全員から、総合評価として「概ね適切である」との評価をいただきました。評価結果の詳細については、当センターHPをご覧ください。

当センターでは、それぞれの項目ごとにいただいた指摘事項や御意見を踏まえ、引き続き実効ある試験研究・研究成果の普及に全力で取り組んで参ります。



評価会議の様子

【企画管理部 大内 環】

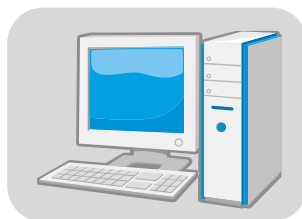
宮城県林業技術総合センター

〒981-3602

黒川郡大衡村大衡字はぬ木 14

TEL022-345-2816 FAX022-345-5377

<http://www.pref.miyagi.jp/stsc/>



メッサ(METSÄ)とは・・・

森をこよなく愛するフィンランド人の言葉で「森、木」を意味します。